

# 万葉集における七夕伝説の構成

—人麻呂歌集七夕歌群から—

宮崎 路子

## 序

旧曆七月七日の宵まつり、「七夕」といえば、だれしも、牽牛と織女の二星逢会の物語を思い出すことができるだろう。天の川に隔てられ、年に一度、七月七日の夜のみ逢うことの許された二星の悲恋の物語は、もともと古代中国で生まれた伝説であった。蔵中進氏によると「漢中の地を東北から南西に向かって流れる漢水流域に伝承された、織女すなわち機織を業とする処女と牽牛すなわち牛を牽いて大地を耕す若い農夫との、漢水を隔てての恋物語が、初秋の夜空を東北から西南に流れる天の川—天漢に投影されたのがその原型で、漢中の地に機織りと牛耕が行なわれるようになった時代以後の物語であろう。」とある（注1）。

この中国に生まれた「七夕伝説」は、それがいつごろ我が国に伝来したかは明らかではないが、我が国の上代の人々の心をとらえたらしく、万葉集に七夕伝説に基づく歌が数

多く収められている。では、万葉人は、この大陸から伝わった外来の伝説をどのように受けとめ、我が国の文学である和歌においてどのように表現したのでろうか。

※以下、『萬葉集私注』土屋文明著（筑摩書房）をテキストとする。

—

万葉集に「七夕」と題する歌は一三二首収められているが、その数は万葉集総歌数約四五〇〇首からみても決して少なくない。それらを挙げるゝ次のようになる。

巻九	巻八	短歌	長歌	作	者
1	15		1	山上憶良	12（一五一八—一五二九）
				湯原王	2（一五四四—一五四五）
				市原王	1（一五四六）
				〔藤原房前〕	2（一七六四—一七六五）

卷十	96	2	人麻呂歌集 作者未詳	38 (一九九六—二〇三三) 60 (二〇三四—二〇九三)
卷五	4	1	柿本人麻呂 遣新羅使人	1 (三六一—) 3 (三六五—三六五八)
卷七	1		大伴家持	1 (三九〇—)
卷八	2		大伴家持	3 (四一二—四一二七)
卷九	1		大伴家持	1 (四一六—)
卷二十	8		大伴家持	8 (四三〇—四三一一)

万葉集には以上の他に、巻九の間人宿禰が泉河の辺で詠んだ「彦星のかざしの玉の妻恋に乱れにけらしこの川の瀬に」(一六八六)など七夕伝説に基づいて詠まれたと思われる歌が存在する。

巻十に収められた七夕歌は、それらの制作年代、作者等については、二〇三三番左注に、

此歌一首。庚辰年作之

右。柿本朝臣人麻呂歌集出

とあるのみで、それらが人麻呂歌集七夕歌と作者未詳歌群

に大別されることと、二〇三三番が天武九(六八〇)年であらうという事のほか、明らかにされていない。しかし、このことに関して、『日本古典文学大系』の「各巻の解説」の中に、巻十について次のような記述がある(注2)。

歌の制作年代は、明日香・藤原の代から奈良時代に及ぶものと見られ、風流を樂しむ傾向の歌、繊細な感じの歌、類想、同型の表現、中国文化の影響などが相当量見出だされる点からして、当代知識階級の一番水準の作が主となっていると思われる。同巻のうちにも、他の巻にも、類想・類歌のしばしば見られるのはその為であろう。(中略)奈良びとが作歌の参考のために作った手控えを基礎として手を加えたものではなからうか。名のある歌人の作とはほぼ同じものが、左注も付せず無名のまま載せられているのは、そういう事情によるのであろう。

もしこれに従い得るのならば、巻十の七夕歌群の中に、「奈良時代」の「当代知識階級の一般水準」の人々における一般的な「七夕」もしくは「七夕伝説」のイメージを見ることができよう。そこで巻十 七夕歌群、とくに人麻呂歌集七夕歌群を中心に上代人にどのように「七夕」が理解されていたかを見ていきたい。

人麻呂歌集七夕歌群においてはしばしば、その構成・配列について論じられ、その前半部に七夕以前の時を詠んだ歌が多く存在していると指摘される（注3）。

A ①天の川水さへに照る舟はてて舟なる人は妹と見えき

や (一九九六)

②ひさかたの天の川原にぬえ鳥のうら歎けましつぞし

きまで (一九九七)

③吾が恋ふる妻はしるきを行く船の過ぎて来べしや言

も告げなむ (一九九八)

④あからひくしき細布の子をしば見れば人妻ゆゑに吾

恋ひぬべし (一九九九)

⑤天の川安の渡りに船浮けて秋立つ待つと妹に告げこ

そ (二〇〇〇)

⑥み空より通ふ吾すら汝ゆゑに天の川路をなづみてぞ

来し (二〇〇一)

⑦八千戈の神の世より乏し妻人知りにけり継(告)ぎ

てし思へば (二〇〇二)

⑧吾が恋ふる丹の穂の面今宵もか天の川原に石枕まく

(二〇〇三)

⑨己が夫ともしむ子等は泊てむ津の荒磯枕きて寝む君

待ちがてに (二〇〇四)

⑩天地と別れし時ゆおのが妻然ぞ手にある秋待つ吾は

(二〇〇五)

⑪彦星は嘆かす妻に言だにも告げにぞ来つる見れば苦

しみ (二〇〇六)

⑫ひさかたの天つ印と水無し川へだてて置きし神世し

恨めし (二〇〇七)

⑬ぬばたまの夜霧こもりて遠けれども妹が伝は早く告

げこそ (二〇〇八)

⑭汝が恋ふる妹の命は飽き足りに袖振る見えつ雲がく

るまで (二〇〇九)

⑮夕星も通ふ天路を何時までか仰ぎて待たむ月人男

(二〇一〇)

⑯天の川い向い立ちて恋ふと汝に言だに告げむ妻と言

ふまでは (二〇一一)

⑰白玉の五百つ集を解きも見ず吾は離れがたぬ会はむ

日待つに (二〇一二)

渡瀬昌忠氏は以上の人麻呂歌集七夕歌群の前半部に「待

つ」という動詞が多用されている(⑤⑨⑩⑬⑮)点に注目

し、この前半部を「七夕の到来以前の時や人を待つ思いを

歌う」としている(注4)。

万葉集と同時代の漢詩集に『懐風藻』があり、その懐風

藻にも六首「七夕」と題する詩が収められているが、このような七夕以前の思いは、懐風藻においては詠まれておらず、七夕当夜の感慨、特に、逢会後の別離の憂いが思いの中心であるらしく、六首中五首が翌朝の別れに際しての嘆きで結んでいる。

また、同じ巻十の作者未詳歌群では、人麻呂歌集において約半数をしめている七夕以前の待つ思いを詠んだ歌は少なく、人麻呂歌集七夕歌にみられるような、②⑩のような逢えぬ嘆きを詠んだ歌はない。それに対し、七月七日当夜の時の訪れから翌朝の別れまでの二星の逢会における思いを詠んだ歌がほぼ三分の二を占める。このことは、懐風藻の七夕歌の影響をあらわしていると思われる。

また、渡瀬氏は「待つ」と同じように前半部に特徴的に見られる「告ぐ」という使者によって消息や思いを相手に言葉で伝えるという意の言葉(③⑤⑦⑩⑫⑬)を挙げ、使者なる者の存在を示唆している(⑦はテキストとした『万葉集私注』では「継ぎ」とあるが、多用されていることは違くない)。つまり、人麻呂歌集七夕歌群においては牽牛、織女その他に使者が登場してくるというのである。そして同氏はその使者なるものは⑮に詠まれた「月人男」であるとしている。

ここで少し「月」に注目してみたい。七夕歌に月が詠み

込まれたことに関して、小島氏は、懐風藻に詠まれている「桂月」「月鏡」「月桂」といった七日の夜を飾る、漢詩のなかの景物としての「月」を挙げ、「歌はその月を擬人化したに過ぎない」としている。しかし、「景物としての月」をすくりに「擬人化された月」と同じとみてよいものであろうか。万葉集七夕歌に「月人男」の存在は、次の三首にも見られる。

(a) 秋風の清きゆふべに天の川舟漕ぎ渡る月人男

(二〇四三)

(b) 天の原通ふを射むと白真弓ひきて隠れり月人男

(二〇五一)

(c) 大船にま梶繁貫き海原を漕ぎ出て渡る月人男

(三六一一)

(a)(b)は、巻十作者未詳歌群の歌であり、(c)は、巻十五に収められた歌で、「右柿本朝臣人麻呂歌」と左註をもつものである。また七夕の歌の他に、巻十の「詠月」にも、

(d) 天の海に月の舟浮け桂梶かけて漕ぐ見ゆ月人男

(二二三三)

のように、「月人男」の存在が見られる。(a)(c)(d)においては、夜空を月の舟を漕いで渡る者として、(b)においては、織女星のもとへ通う彗星を射ようと隠れて待つ者として描かれており、「月人男」と表現された月は、懐風藻七夕詩

に詠まれた静的な「月」に比べると動的人間的で「桂月」「月鏡」と同質のものとは思えない。⑮の「月人男」には、「漕ぐ」「射る」といったそれ自身の動作を表す表現はないために、景物としての「月」と見粉うが、ここに詠まれた月は天を通う月であり、懐風藻の背景的な役割の「月」と違い動きが感じられる。⑯の「月人男」も(a)と(d)と同じように月を人にみなし、表したものである。

そうなると、⑮の歌は、他に七夕に関連のあることばはなく七夕歌ではないとも考えられる。しかし、本来秋の夜の景物である月を擬人化し「七夕」の歌に登場させたのは、元来、天上の天の川を挟む二星を「七夕伝説」において男女とみなしたことにならない、「月」を人物として登場させ、新たな「七夕」の物語をつくりあげようとしたのではないだろうか。人麻呂歌集七夕歌群では「月人男」は、織女、牽牛に並ぶ「七夕」の登場人物であったのだ。

そして、渡瀬氏はこの「月人男」が年に一度しか逢うことのできない二星の様子を伝える使者の役割をはたしているとし、人麻呂歌集七夕歌の前半のA部を「牽牛と月人の対詠」であるとしている。つまり、A部は、牽牛と月人の対詠により、七夕以前の二星が逢うことのできる七月七日を待つ様が詠まれている。

①は、『万葉集私注』にならない、右の訓詁を載せている

が、この訓みについては意見の分かれるところであり、難解な歌のひとつである。しかしこれを、牽牛の月人への問い掛けとみると「天の川に水まで光るほどの月の舟がとまっている、舟にいる月人よお前には我妻である織女星の姿が見えたのだろうか」と解釈できよう。そしてそれに続く②はその問い掛けに対し、月が、「織女星は、天の川の川原でぬえ鳥が鳴くようになげいていらっしやう」と七夕以前の織女星の姿を答えている。またこのような牽牛と月人の対詠は、⑨⑩においてもあらわれている。「わたしが恋い思う紅の美しい顔の織女星は今夜も天の川の川原に石を枕として寝るのだろうか」と牽牛が問い掛け、「自分の夫となかなか逢うことのできない織女星は今夜も舟の着く港の荒磯を枕にして寝るだろう、夫を待ちきれずに」と月が答える。

その他にも、A部には⑤の「天の川安の渡りに」、⑦の「八千戈の神のみ世より」、⑩の「天地の別れし時ゆ」、⑫の「隔てておきし神世」など、日本古来の神話が詠み込まれ、中国の七夕伝説とは違った、日本独自の伝説を作りあげようとしたことがよみとれる。

以上の七夕以前の思ひは、懐風藻の七夕詩のなかには詠まれていない。それは懐風藻に詠まれた詩が、「七夕」つまり「なのかよ」の七夕詩宴により詠ぜられていた、とい

う事情によるものであろう。それに対し、人麻呂歌集七夕歌は、比較的自由的な立場においての作歌であらう。七夕を詠んだ歌ではないと思われる歌が含まれるのもそのためであると考えられる。しかし、だからこそ「月人」を登場させたり、わが国の神話と結びつけたりと中国の伝説とは違う、わが国独自の物語を作り上げ得たのである。

### 三

では、七日の宵の様子はどのように表現されているであらう。人麻呂歌集七夕歌は物語的性格をもっと指摘されているへ注5が、それは、特に以下のB部に顕著にあらわれていると思われる。B部では二星の逢会の様子がストーリーの展開に沿って整然と配列されている。

B①天の川水陰草の秋風に靡かふ見れば時は来にけり

(二〇一三)

②吾が待ちし秋萩咲きぬ今だにもほひて行かな遠方人に  
(二〇一四)

③吾が背子にうら恋ひ居れば天の川夜船漕ぎとよむ梶の音聞ゆ  
(二〇一五)

④まけ長く恋ふる心に秋風ゆ妹が音聞ゆ紐解きゆかな  
(二〇一六)

⑤恋しくはけ長きものを今だにも乏しむべしや会ふべ

き夜だに  
(二〇一七)

⑥天の川去年の渡で移ろへば川瀬を踏むに夜ぞ更けにける  
(二〇一八)

⑦古ゆ上げてし機もかへり見ず天の川津に年ぞ経にける  
(二〇一九)

⑧天の川夜船をこぎて明けぬとも会はずと思ふ夜袖かへずあらむ  
(二〇二〇)

⑨遠妻と手枕交へて寝たる夜は鶏が音なとよみ明けば明くとも  
(二〇二一)

⑩相見らく飽き足らねどもいなめの明け行きにけり船出さむ妻  
(二〇二二)

⑪さ寝そめていくだもあらねば白たへの帯こ乞ふべしや恋もすぎねば  
(二〇二三)

⑫万世に携り居て相見とも思ひ過ぐべき恋にあらなくに  
(二〇二四)

⑬万世に照るべき月も雲がくり苦しきものぞ会はずと思へど  
(二〇二五)

⑭白雲の五百重がくりて遠けども宵去らず見む妹があたりは  
(二〇二六)

⑮我がためと織女のその宿に織る白細布は織りてけむかも  
(二〇二七)

⑯君に会はず久しき時ゆ織る服の白袴衣垢づくまでに

(二〇二八)

以下、人麻呂歌集七夕歌群に詠み込まれた「七夕」にまつわる二星逢会の物語を時の流れにそってみていきたい。

①のように、「天の川の水影草が秋風に靡くのをみて」二星は、待ちに待ったその逢会の時が訪れたことを知り、②で「わたしが待ち望んだ秋萩が咲いた、いまこそ、その香りを匂いながら、遠くのあの人のもとへ行こう」と逢う決意を詠んでいる。ここで、川を渡り逢いに行くのは牽牛である。

一方、懐風操においてはこの二星の年に一度の再会にあたって天の川を渡るのは織女星である。その織女星の姿は「靈姿理雲鬢」(53 山田三方)と「雲」のような美しい髪を持ち、またその笑顔は、「笑臉飛花映」(74 百済和麻呂)と、「花」のように美しいと表現されている。そして、川を渡る織女星の乗り物は右に挙げた詩においては「仙車」「神駕」、他の詩においても「鳳蓋」「仙駕」「鳳駕」と、きらびやかで貴族的であり、渡河の際には「鵲橋」つまり鵲の橋まで架かり幻想的で非現実的である。このようなきらびやかな織女星の描写に対し、牽牛星の具体的な描写は六首中一首もなく、ただ織女星の逢会の相手として描かれているだけである。このことは、行動を起こすのが織女であることと関係しているわけであろうが、懐

風藻に詠まれた「七夕」のいわゆる主役は、織女星であつたらしい。

懐風藻の雅びやかで幻想的な織女の渡河に対し、牽牛が舟を漕ぎ渡ると至って現実的である。これは、次の③で「わたしの夫に心のうちに恋い思っていると、天の川に夜船を漕いでいる梶の音が聞こえる」と、織女の立場で詠んでいることからわかる。

この七夕の詩と歌の相違については小島氏が「万葉集の二星の会合は、男が女人のもとへ行くという地上の現象のそのままの反映である。この点において懐風藻の詩は、中国の模倣であり、行動を起こすのは織女星である。」また、「万葉集の歌は中国詩にみるような超現実的なものではなく、(中略)二星は人間の庶民的な男女の姿で描かれている。」と述べている(注6)。

作者未詳歌群における織女の様子は人麻呂歌集のそれに比べ具体的で、(a)のように自分で橋を渡そうとしたり、(b)のように自ら川を渡る行動的な織女も描かれている。

(a)はたものの踏木持ち行きて天の川打橋わたす君が来むため (二〇六二)

(b)天の川棚橋わたせ棚機はい渡らさむに棚橋渡せ

(二〇八一)

また、(c)(d)のように渡し守に牽牛の渡河を促す織女や、(e)

のように牽牛の帰りの船を遅らせるために梶竿を隠す織女もあらわれる。

(c) 渡守船渡せをと呼ぶ聲の至らねばかも梶の音のせぬ

(二〇七二)

(d) 渡り守船はや渡せ一年に二たび通ふ君にあらなくに

(二〇七七)

(e) 吾が隠せる梶竿無くて渡り守船貸さめやもしまはし

あり待て

(二〇八八)

(a)(b) はやはり、懐風藻七夕詩においても主役である織女の渡河、そして、そのために橋が架かるといった中国詩の影響によるものであろう。そして、(c)(d)(e) は、人麻呂歌集七夕歌群にみられる我が国における独自の「七夕」のなかに、中国詩における行動的な織女を表現した結果であらうと考えられる。

次に③においては、逢会前の織女の気持ちが歌われているが、④では、「長い月日恋い思うわたしの心に秋風の中から妹の物音が聞こえる。衣の紐を解きそちらへ行こう。」と牽牛の気持ちが歌われている。⑤⑥⑦では、「恋しく思ったのは、月日の長いことであるけれど、今だけは淋しいと思うまい、逢う今夜だけは」「天の川の去年の渡り場が、変わっているの、川瀬を探して踏むうちに、夜が更けてしまった」「昔から織りかけておいた機も、かえりみせず

に、天の川の渡りに年を重ねてしまった」と、⑤⑦においては織女の立場で、⑥においては牽牛の立場で、逢うことのできる七日の夜にあって、逢うことのできなかつた月日の長かつたことを詠んでいる。そして、⑧で「天の川を夜船を漕いで、夜が明けようとも、逢おうと思う夜に、袖をかわさずあることであろうか」と再び、今度は渡河中の牽牛の強い決意を詠んでいる。

そして、二星は、逢会し、一年の思いを晴らすのだが、そこに喜びは詠まれていない。寝屋においては牽牛の立場で⑨のように、「遠く離れた妻とこうして手枕をかわして寝た夜に、鶏は鳴き騒がないでくれ、夜が明けようとも」と翌朝の別れを定めと知りながらも、その時がこないことを願う。しかし、別れの朝は、無常にもやってくる。そのさけることのできない時の訪れを、牽牛の立場からは、⑩のように「顔を合わせ満足したわけではないが、もう夜が明けてしまった、さあ別れて船出しよう妻よ」と冷静に受けとめている。一方織女の立場からは、次の⑪で「寝そめてまだいくらもたたないのに白妙の帯をよこせなどというべきでしょうか、まだ恋の思いがつきないのに」と逢瀬の時の短いことを嘆いている。そしてまた牽牛は⑫の歌で答え「万世の後まで手を取り合って向かい合っているも忘れられる恋ではありません」とやはり、別れに対して織女と



比べ、冷静である。⑬⑭は、別れに際しての歌である。まず、「万世まで照るはずの月さえも雲に隠れることがある、来年も私たちは逢うだろうと思うけれど苦しいものである」と織女の立場で歌い、牽牛の立場では「白雲が幾重にも重なった後に隠れて遠いけれど、宵々ごとに見よう、妹のあたりを」と歌い二星は別れるのである。

人麻呂歌集七夕歌における「七夕」のストーリーは、ここでは終わらず、二星が別れて後、しばらく時が流れてからの歌も詠まれている。⑮は牽牛の立場で「私のためと織女が、その宿で織る白布は、織り上げただろうか」と歌い、⑯は織女の立場で「あなたに逢わないで久しい以前から織っている白布は垢付いてしまうほどになりました」と別離後の時の経過を歌っている。

以上が人麻呂歌集七夕歌における「七夕」の物語であると考えられる。人麻呂歌集七夕歌は以下五首続くが次の歌は、

天の川梶の音聞こゆ彦星と棚機女と今宵会ふらしも

(二〇二九)

と二星逢会の日を歌っており、時の流れに逆らっている。また、二〇二八番までが「七夕」のストーリーの登場人物に身を置いての詠歌であったのに対し、第三者の立場で詠まれている。

つまり、人麻呂歌集七夕歌は、まず前半部に七日以前の逢えぬ嘆きを、それに続き七日当夜の二星逢会の様、そして、翌朝の別れを「七夕」の物語の登場人物となり詠んだ歌を、そのストーリーの展開に従い配列し、「七夕」の物語を完成させ、そのあとに、補遺部が続く形で構成されている。

#### 四

人麻呂歌集七夕歌では七夕以前の歌が半数をしめ、そこにおいて、逢えぬ嘆きを詠み、一年に一度しか逢うことの許されない定めに対する悲哀が中心となっている。それに對し、懷風藻は当夜の様子を歌った詩であり、別離の憂いが思いの中心として詠まれている。また歌う立場も、懷風藻では、地上から、天上へと思いを馳せた歌であるが、人麻呂歌集においては、織女、牽牛、または月人と伝説の人物に身をおいて詠んでいる。

人麻呂歌集七夕歌と懷風藻七夕詩の間には以上のように様々な相違がみられ、同じであるのは年に一度の織女星と牽牛星の逢会が天の川を舞台に行なわれることのみである。しかし七日の逢会に際しての天の川の渡河においても貴族的、幻想的な懷風藻に対し人麻呂歌集七夕歌は庶民的、現実的である。高野正美氏は、「漢詩の場としての宮廷の雅

会の影響なしに、七夕が和歌の素材たりえたかという疑問が生じ」と言っている（注7）が、むしろ、宮廷の雅会においての漢詩の影響がありながら、なぜこのような相違がみられるのかという点に疑問を抱く。歌う立場、時、思い、内容すべてにおいて、相違がみられるのは、人麻呂歌集七夕歌が、懐風藻の詩が詠ぜられる以前、つまり、七夕の詩宴が行なわれるようになる以前に成立したことを示していると思われる。

しかし、七夕の宴が行事化し、七日に詩だけでなく歌が詠まれることが習慣化していった。その中で、漢詩の影響を受けつつ詠まれた歌を集めたものが作者未詳歌群の七夕歌と考えられる。そこで作者未詳歌群では織女、牽牛の身となり歌を詠むという形式は受け継がれているが、第三者の立場の歌の占める割合が高くなってきている。解釈により多少の異同はあるが、六〇首中の約四分の一が第三者の立場の歌と考えられる。これはやはり、先に挙げたように懐風藻七夕詩が地上の七夕の宴の場で天上へ思いを馳せての作であったことの影響であろう。

中国から伝わった「七夕伝説」は、わが国で日本の文化にあった独自のものに作り上げられるが、七夕の宴が行事化することにより、再び中国詩の影響を受け変化していくのである。

注1 蔵中進「万葉集七夕歌と中国文学」（『万葉集を

学ぶ5』伊藤博・稲岡耕二編昭和53 有斐閣選書）

2 高木市之助・五味智英・大野晋校注『日本古典文学大系6「万葉集3」』（岩波書店）

3 大久保正氏「人麻呂歌集七夕歌の位相」昭和50年

（『万葉集研究 第四集』小島憲之・五味智英編 塙書房）、稲岡耕二氏「人麻呂歌集七夕歌の性

格」昭和54年（『万葉集研究 第八集』小島憲之・

五味智英編 塙書房）、渡瀬昌忠氏「人麻呂歌集

の七夕歌群―冒頭歌と末尾歌―」（『実践女子大

学文学部 紀要 第33集』平成3年）

4 渡瀬昌忠氏前掲論文

5 大久保正氏前掲論文、倉林正次氏「人麻呂歌集七

夕歌」（『万葉集を学ぶ5』昭和53 有斐閣選書）

6 小島憲之氏前掲論文

7 高野正美氏「七夕詩の位相」（『万葉集作者未詳

歌群の研究』昭和57年 笠間叢書）